

初期近代英語における *no doubt* 及び関連表現について —シェイクスピア作品の分析から—*

鈴木 大介

1. はじめに

小西編(2006: 419-20)では、*doubt* を使った文副詞的用法の表現として、*doubtless(ly)*, *no doubt*, *undoubtedly*, *without (a) doubt*, *beyond (a) doubt* を挙げている。実際には、一億語の大規模コーパスである British National Corpus (BNC)を検索してみると、(1a, b)のように文副詞として *no doubt* が最も多用されている。^{1, 2}

(1) a. The question *no doubt* appears logical. (BNC: G1A)

b. *No doubt* his nurse had her answers. (BNC: HPT)

一方、史的研究に目を転じると、家入(2008: 333-34)では *OED* の引用文データに基づいて、否定文の動詞 *doubt* との関連の中で、*no doubt* の史的变化が分析されている。そこでは、16 世紀以降、時代と共に名詞の *doubt* が *no doubt* という決まった言い方で使用される割合が高くなっていることが示されている。³

* 本稿の執筆に際し、常日頃よりご指導いただいている家入葉子先生（京都大学）、ならびに本研究のきっかけを与えてくださった相田周一先生（大阪府立大学）に深く感謝申し上げます。

¹ Brigham Young University の Mark Davies により管理・運営されているフリーオンラインコーパスの BYU-BNC を検索し、文副詞として機能している例を抽出すると、*doubtless*, *no doubt*, *undoubtedly* それぞれ 731, 2701, 2202 例が得られる。(Cf. 鈴木 (2011))

² 例文中の斜体および強調は筆者による。

³ 成句 *without doubt*, *no doubt* 「疑いもなく」の *OED* 初出例はそれぞれ 13 世紀末、14 世紀後半である。(Cf. 寺澤編 (1997))

そこで、本研究では、*no doubt* が広がった初期近代英語に着目し、シェイクスピア戯曲 37 作品における *no doubt* とその関連表現の使用を明らかにし、現代英語との関わりを考察する。

2. 現代英語における用法

現代の *no doubt* は、Quirk et al. (1985: 623)が “like *no doubt*, it [*doubtless*] in fact implies some doubt and is synonymous with ‘very probably’”と述べているように「疑いもなく」という文字通りの意味ではなく、確信の意味が弱くなっている。一方で、*undoubtedly, without (a) doubt, beyond (a) doubt* は、小西編 (2006: 420)で、いずれも「確かに、疑いもなく」という話し手の強い確信を表すとされているように、*no doubt, doubtless(ly)*とは確信の度合いが異なるようである。Swan (2005: 353)も “*Doubtless* is similar to *no doubt*; *undoubtedly* is similar to *there is no doubt that*.”と述べている。典型的な例文を(2a-c)に示している。

(2) a. *No doubt* it’ll rain soon. (Swan 2005: 353)

b. You have *doubtless* or *no doubt* heard the news. (Fowler 1998: 230)

c. During the action the person will *undoubtedly* have certain feelings towards it and gain satisfaction from achievement. (ACAD) (Biber et al. 1999: 854)

no doubt の語法については、家入(2008: 333-34)によると、ほぼ全ての時代を通じて *no doubt* の例の多くは接続詞 *that* を従えるのではなく、独立に文全体を修飾するような形で使用されている。現代英語でも同様に、副詞用法の *no doubt* には名詞的性

質が完全に消失していることや、他の法副詞が生起する位置と同じであるという性質が、福田 (2010: 3-7)で指摘されている。

さらに、*doubt* を使った他の類義表現とは異なり、*no doubt* については談話標識としての使用も指摘されている。Simon-Vandenberghe and Aijmer (2007: 122)と Biber et al. (1999: 874)はそれぞれ(3a, b)のような具体例を示しながら *no doubt* を談話標識として分析している。

(3) a. *No doubt, money played its part in this* (ICE-GB: W2C-007/64)

b. *But no doubt we'll have a few showers.* (CONV) (Biber et al. 1999: 874)

(3a)のように、*no doubt* がコンマ(,)によって区切られる例は談話標識の性質を帯びると述べられている。同じように、(3b)の例については “a speaker can use *no doubt* to mark shared familiarity with the interlocutor, as in this comment after a forecast for clear weather” (p. 874) というように相手との親密さを確かめたりする文脈で用いられていると説明されている。

シェイクスピアの言語においても談話標識の使用が指摘されている。Blake (2002: 298-99)は、“But discourse markers do appear in verse passages where they help to point the speech and bring across the emotional standpoint of the speaker.”と述べ、散文だけではなく、以下の(4)のような韻文での具体例も挙げ、この *no doubt* を談話標識に含めている。⁴

⁴ Blake (2002: 299)によると、このような談話標識は節の最初、あるいはその付近に生起し、これらの生起位置は散文よりも韻文に特徴的である。

(4) Who had *no doubt* some noble creature in her (*The Tempest*)

以上のような現代英語における *no doubt* を中心とした *doubt* 表現の用法や分布を念頭において、*no doubt* の文副詞的用法が広がりはじめた初期近代英語に着目し、次節ではシェイクスピア作品における *no doubt* とその関連表現を分析する。

3. シェイクスピア作品における用法

3.1. *no doubt* 関連表現の概観

本研究では、戯曲 37 作品中の *no doubt* 及びその類義表現を分析するにあたり、^{5, 6} 最初に *doubt* 全例を調査し、その中から *no doubt* 関連表現を抽出した。⁷ その結果、現代英語に見られる *beyond (a) doubt* は得られなかった。次に、*doubtless(ly)* や *undoubtedly* の調査を行い、*doubtless* は 7 例観察できたが、*doubtlessly* と *undoubtedly* は 1 例も見られなかった。最後に、これらの表現の中で文副詞として機能しているものを取り出し、^{8, 9} 以下の表に示すように、全 43 例を本稿での分析対象とした。

⁵ 本研究では、*Project Gutenberg* (<http://www.gutenberg.org/>)からの電子テキストを調査に用いた。

⁶ 齋藤・山口・太田共訳 (1968: 38)は、*doubt* はその今日の語形でシェイクスピアに採用されていると述べているが、実際に本調査でも *doubt* の異綴りは全く見られなかった。

⁷ *doubt* 全 178 例中、動詞が 108 例、名詞が 70 例あり、その名詞の用例の中から、以下のような *a doubt, my doubt* という形で文中の目的語/補語位置に生起しているものを除いた。

So soon as you arrive, shall clear that *doubt*. (*Winter's Tale*)

⁸ 以下の例のように、該当表現が生起している例において節を成していないものも同様に分析対象から除外した。

Yes without all *doubt*. (*Henry VIII*)

⁹ 文副詞ではなく、文中の目的語/補語位置に生起している *no doubt* は 3 例観察できた。ここには、以下に示すような例が含まれており、*no doubt* に続く *that* は全て表出していないことがわかった。

doubtless, past doubt の具体例を(5a-c)に示す。

表 1. *no doubt* 及び関連表現の生起数

	<i>no doubt</i> 関連表現	文副詞の用例
<i>beyond (a) doubt</i>	0	0
<i>doubtless</i>	7	5
<i>no doubt</i>	31	28
<i>out of doubt</i>	10	9
<i>past all doubt</i>	1	0
<i>past doubt</i>	2	1
<i>undoubtedly</i>	0	0
<i>without all doubt</i>	1	0
<i>without doubt</i>	1	0
計	53	43

- (5) a. *Doubtless* he would have made a noble knight. (*Henry VI*)
 b. This honest creature *doubtless* Sees and knows more, much more, than he unfolds. (*Othello*)
 c. This mutiny were better put in hazard Than stay, *past doubt*, for greater: (*Coriolanus*)

上に述べた通り、現代英語では *no doubt* が最も高い頻度で用いられているが、表 1 を見る限りでは、シェイクスピアの言語においても *no doubt* が多数を占めており、現代英語との関連を指摘することができる。また、現代英語においては高頻度で用いられる *undoubtedly* が、シェイクスピア作品においては全く観察

Haue patience Madam, ther's *no doubt* his Maiesty Will soone recouer his accustom'd health. (*Richard III*)

できなかったという点は興味深い。一方で、現代英語のコーパス上では見られないような *out of doubt* や *past doubt* の例がシェイクスピアの言語においては観察ができ、¹⁰ 多様な表現が用いられていることがわかった。特に *out of doubt* は *no doubt* の次に多く用いられており、その用法は注目に値する。

3.2. *no doubt* と *out of doubt*

次に、*no doubt* と *out of doubt* の用法を詳細に見るため、各表現の生起位置に着目し、分析を進める。表 2 は、表 1 のデータを Initial（節頭）、Medial（節中）、Final（節末）という 3 つの生起位置ごとに整理したものである。

表 2. *no doubt* 及び関連表現の生起位置

	Initial	Medial	Final	計
<i>beyond (a) doubt</i>	0	0	0	0
<i>doubtless</i>	2	2	1	5
<i>no doubt</i>	15	12	1	28
<i>out of doubt</i>	5	2	2	9
<i>past all doubt</i>	0	0	0	0
<i>past doubt</i>	0	0	1	1
<i>undoubtedly</i>	0	0	0	0
<i>without all doubt</i>	0	0	0	0
<i>without doubt</i>	0	0	0	0
計	22	16	6	43

¹⁰ BNC, COCA を検索しても、*out of doubt* は 1 例も得られなかった。*past doubt* は COCA で 1 例、*past all doubt* は BNC で 1 例観察できた。

現代英語においては、文副詞は一般的に *Medial* の位置に生起するとされており、¹¹ *doubtless* や *undoubtedly* についての調査結果も軌を一にする。一方で、*no doubt* については *Medial* よりも *Initial* の位置に生起する割合の方が高いことが指摘されている。¹² 本調査結果に目を向けると、表 2 のデータから、シェイクスピアが高頻度で用いている表現の生起位置については全般的に *Initial* の割合が高いことが明らかである。(6a-c)はそれぞれ *Initial*, *Medial*, *Final* の位置に生起している *no doubt* の具体例である。それぞれの例において、*no doubt* は他の文副詞が生起し得るのと同じ位置に生起している。

- (6) a. *No doubt* we bring it to a happie issue Buck. (*Richard III*)
 b. A many of our bodyes shall *no doubt* Find Natiue Graues:
 (*Henry V*)
 c. We shall haue Great store of roome *no doubt*, left for the
 Ladies, (*Henry VIII*)

さらに、(7a)の例では、節の構造から切り離され、*no doubt* が繰り返し用いられて話者の感情が表出している。この *no doubt* は

¹¹ Biber et al. (1999)は、スタンスを表す副詞類が全般的に、全てのレジスターにおいて *Medial* に生起している割合が高いことを示している。Biber et al. (1999)の言うスタンス副詞には、*no doubt* や *undoubtedly* の他に、*probably*, *I think*, *in fact*, *really*, *according to ...*, *mainly*, *generally*, *in my opinion*, *kind of*, *so to speak* 等の epistemic adverbials や、*unfortunately*, *to my surprise*, *hopefully* 等の attitude adverbials、さらには *frankly*, *honestly*, *truthfully*, *in short* 等の style adverbials が含まれている。

¹² 鈴木 (2011), 福田 (2010), Simon-Vandenberghe and Aijmer (2007) 等、複数の先行研究において、大小さまざまなコーパスを用いた調査結果を見ることができる。

談話標識として機能していると考えられる。(7b)が示すように、*no doubt* は文副詞の一般的な生起位置である *Medial* の位置に生起しているが、コンマ(,)で挟まれており、*parenthetical* な働きを強めて用いられている。句と節で形式は異なるが、*that* が省略され1つの副詞のように機能する *I think* や *I doubt* と同じように考えることができる。¹³ 以上のようにシェイクスピアの言語における文副詞の *no doubt* は、現代英語における *no doubt* の振る舞いと同様であるといえよう。¹⁴

- (7) a. *No doubt, no doubt, and so shall Clarence too, (Richard III)*
b. They are wise and honorable, And will, *no doubt*, with reasons answer you. (*Julius Caesar*)

続いて、*out of doubt* であるが、すでに述べたように、シェイクスピア作品においては *no doubt* 関連表現の中で、*no doubt* の次によく用いられており、このことは類義表現間の歴史的発達を考える上でも特筆すべき点である。(8a-c)にその例を示しているが、*no doubt* の例と同じような生起環境が観察できる。現代英語で使用される *without (a) doubt* や *beyond (a) doubt* の文副詞

¹³ *I think* や *I doubt* については、家入 (2008)、Tagliamonte and Smith (2005)、Thompson and Mulac (1991)等の先行研究で扱われている。

¹⁴ 意味の観点から、現代英語の *no doubt* については確信度が弱まり、‘very probably’の意味で用いられると先行研究は指摘している。シェイクスピアの言語における *no doubt* は、現代英語と比較すると、認知的用法の法助動詞との共起が全く見られず、また生起位置も法副詞の一般的な位置である *Medial* よりも、節頭で談話機能を担う *Initial* の位置が多い。以上の事実からは、文字通りの「疑いなく」という強い確信を表す意味で用いられていたと考えられる。(Cf. 鈴木 (2011)) ただし、法助動詞との共起については、法助動詞そのものの発達を考慮する必要がある、その詳細は稿を改めることにする。

的用法は全く観察できず、この時代では *out of doubt* がそれらの前置詞句と同様に振る舞っていることから、歴史的に *out of doubt* が衰退し、*without (a) doubt* や *beyond (a) doubt* が発達したという可能性が考えられる。

- (8) a. *Out of doubt* he is transported. (*A Midsummer Night's Dream*)
- b. And *out of doubt* you do me now more wrong (*The Merchant of Venice*)
- c. He will print them, *out of doubt*; (*The Tempest*)

また(9a, b)が示すように、*out of doubt* という前置詞句の形式であるにもかかわらず、それは **Medial** の位置で用いられており、*no doubt* や法副詞一語と同様に扱うことができる。コンマ(,)で挟まれて **parenthetical** に用いられているという点からも、(7a, b)の例に見られたような *no doubt* の振る舞いと共通していることがわかる。

- (9) a. his feares, *out of doubt*, be of the same relish as ours are:
(*Henry V*)
- b. Misfortune to my ventures, *out of doubt*, Would make me sad.
(*The Merchant of Venice*)

このようにシェイクスピアの言語においては、話者の心的態度の表出にあたり、*no doubt* 以外に *out of doubt* も効果的に使用されている。

4. おわりに

本研究では、初期近代英語における文副詞表現の一例として、シェイクスピアにおける *no doubt* 及びその関連表現の分析を行った。結果として、*no doubt* の例においては現代と同様な分布・用法が見られた。その他に *doubtless* だけでなく、現代英語に見られない *out of doubt*, *past doubt* といった様々な表現が観察できたのは興味深い点である。とりわけ *no doubt* と *out of doubt* が Initial, Medial, Final の全ての位置において使用されており、parenthetical に用いられ epistemic な意味を強めているという点も特徴的である。このことから *no doubt* と *out of doubt* を文副詞一語と同じように捉えることが可能であると考えられる。

本稿では、シェイクスピアの作品に限定したため、初期近代英語期における文副詞表現の一般化には当然ながら注意を要する。また、現代英語との関連を述べるのにもさらなる史的調査・分析が肝要である。

参考文献

- Abbott, Edwin A. 1870. *A Shakespearian Grammar: An Attempt to Illustrate Some of the Differences between Elizabethan and Modern English: For the Use of Schools*. London: Macmillan.
- 荒木一雄・宇賀治正朋 1984. 『英語史 IIIA』 東京：大修館書店.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech and Susan Conrad. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Blake, Norman F. 2002. *A Grammar of Shakespeare's Language*. New York: Palgrave.

- Brinton, Laurel J. 2008. *The Comment Clause in English: Syntactic Origins and Pragmatic Development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brinton, Laurel J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Coates, Jennifer. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Dixon, Robert M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Fowler, Henry W. 1998. *Fowler's Modern English Usage*, 3rd ed. Revised by Robert W. Burchfield. Oxford: Oxford University Press.
- 福田薫 2010. 「副詞用法の no doubt(1)」『人文論究』（北海道教育大学） 79: 1–17.
- Greenbaum, Sidney. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman.
- Halliday, Michael A. K. 1970. “Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English”, *Foundations of Language* 6: 322–361.
- Hope, Jonathan. 2003. *Shakespeare's Grammar*. London: Thomson Learning.
- Hoye, Leo. 1997. *Adverbs and Modality in English*. London: Longman.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Iyeiri, Yoko. 2010. *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. Amsterdam: Benjamins.

- 家入葉子 2008. 「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について—*The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から—」『九大英文学』 50: 317–38.
- 小西友七（編）2006. 『現代英語語法辞典』 東京：三省堂.
- Lyons, John. 1977. *Semantics, Volume 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, Frank R. 1990. *Modality and the English Modals*, 2nd ed. London: Longman.
- Palmer, Frank R. 2001. *Mood and Modality*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perkins, Michael R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rissanen, Matti. 1999. “Syntax”, in *The Cambridge History of the English Language, III: 1476–1776*, ed. Roger Lass, 187–331. Cambridge: Cambridge University Press.
- 齋藤静・山口秀夫・太田朗（共訳）1968. 『シェークスピアの英語—詩と散文—』 東京：篠崎書林.
- Simon-Vandenberg, Anne-Marie. 2007. “No doubt and Related Expressions”, in *Structural-Functional Studies in English Grammar: In Honour of Lachlan Mackenzie*, ed. Mike Hannay and Gerard J. Steen, 9–34. Amsterdam: John Benjamins.
- Simon-Vandenberg, Anne-Marie and Karin Aijmer. 2007. *The Semantic Field of Modal Certainty: A Corpus-Based Study of English Adverbs*. Berlin: Mouton de Gruyter.

- 鈴木大介 2011. 「法副詞 *no doubt* の機能について—類義表現との比較から—」『英語コーパス研究』 18: 17–31.
- Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 寺澤芳雄（編）1997. 『英語語源辞典』 東京：研究社.
- Tagliamonte, Sali and Jennifer Smith. 2005. “*No momentary fancy!*: The Zero ‘Complementizer’ in English Dialects”, *English Language and Linguistics* 9.2: 289–309.
- Thompson, Sandra A. and Anthony Mulac. 1991. “A Quantitative Perspective on the Grammaticalization of Epistemic Parentheticals in English”, in *Approaches to Grammaticalization, II: Focus on Types of Grammatical Markers*, ed. Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine, 313–29. Amsterdam: John Benjamins.
- Visser, Frederikus Th. 1963–1973. *An Historical Syntax of the English Language*. Leiden: E. J. Brill.